

土壌中クロピラリドが野菜・花きの 初期生育に及ぼす影響・データ集（第2版）

日本は飼料の多くを輸入に頼っていますが、海外では、牧草や穀類の栽培に日本では登録のないクロピラリドという除草剤を使うことがあります。クロピラリドが含まれた輸入飼料を家畜に与えると、クロピラリドは家畜のふん尿中に排せつされます。そのふん尿を原料とした堆肥を施用すると、トマトやスイートピー等の特にクロピラリドによる影響を受けやすい野菜や花きでは生育障害が発生する可能性があります（図1）。こうした問題に対し、農林水産省では、農作物においてクロピラリドの影響が疑われる際は速やかに都道府県に報告するよう呼びかけています。クロピラリドによる影響は農作物の生育初期から現れることから、多くの作物の生育初期を対象に、クロピラリドによる影響の有無を判別するポイントを解説した資料を作成・公開しました。

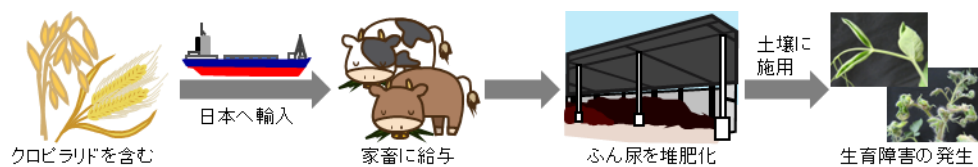


図1. クロピラリドにより農作物に生育障害が現れる仕組み

☆ 技術の概要

1. 野菜・花き 58 品種の生育初期に見られるクロピラリドによる影響を、土壌中濃度ごとに、生育日数に応じた写真で示しています（図2）。
2. クロピラリドによる影響は、主に葉の特徴的な症状として現れます。そこで、葉に着目して判別のポイントを解説しています。
3. クロピラリドによる葉のカップ状の変形や萎縮といった症状については、病虫害や栄養欠乏（または過剰）といった要素障害による症状と区別しにくい場合があります。そのため、これらの違いや判別のポイントも解説しています（図3）。



図2. クロピラリドによる症状の解説

☆ 活用面での留意点

1. この資料は農研機構内のウェブサイトからダウンロードできます。



図3. 要素障害との判別のポイント

(https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/155030.html)

2. クロピラリドによる症状の現れ方は、品種や栽培条件などで変わる場合があります。